

# 北樺太採集記 (下の二)

玉貫光 一

八月九日 曇、後晴。

河川生活の二日目、今日中には是非次の驟舎のあるバルカタ迄着ける豫定なので前夜から一同が早く起きる事を約してあつたので四時に起きる。今にも一雨来さうな暗い空である。

『先生今日は駄目です。雨ですよ』

『どうせバルカタ迄は行けないらしいから野營をやるならもつとゆつくり願いたいね』

『昨夜は二時頃から猛烈な雨だったな』

『連中の一部が暗い天候にかこつけて暗に班長のK助教授に一日休養する事を要求してゐる。口で不平を言ひ乍ら不思議に出発の用意は整ふ。』

五時には再び舟の人となる。今日は獨木舟を二艘組合せて三人づゝ六人となる。

ヤナギ類の聳えた潤葉林を全く離れ、朝霧に覆はれた遠い山脈の頂ばかり見えるのを眺め乍ら舟は悠々と進んで行く。八時頃雲間からちらちらと陽が射して来た。

一丈位の斷層をなして所謂灰土帯の層面がくつきりと境界をなして無限に續いてゐる。森林地帯の斷たれた所は草原的景観をなした曠野が現はれ、其處にはグルムホルツをなした

グイマツがトゲトゲしく立ち列んでゐる。斷層の至る所に巢を營んでゐるシヤウドワツバメが頭をかすめてすいすいと飛んで行く。

遅れた後の舟を待つて或る洲に着けて乾麵麩と牛糞との朝飯をしたためて、再び下る。

河の彎曲が多くなつて太陽が頭の上をぐる／＼廻つてしつかりした方角が定まらない。

ゴドリガモ *Mareca penelope* L. *Phalaropus* *Nettion* *Crecca crecca* L. が群をなしてハイマツの密生した斷層の陰に餌をあさつて、舟が近づいても飛び立たない。と動物班のIさんの銃聲が響き渡る。小さな鴨は首すちから眞紅な血潮をたれて舟べりにさかしまに吊される。銃音に驚ろいた鴨は一勢に飛び立つが決して遠くへは去らないから思ふさま打つ事が出来るのである。鴨に混つてガンも下りて居る。

さうして午になつた。昨夜の間に人夫達に焚かせた冷たい飯を軍隊から配布された魚の罐詰とで沙礫の中洲に上陸して喫する。

ヤマベやイソナ等の清漣を好む淡水魚の無数に棲息するツイミ河もアダツイミから以北はツンドラの有機物が流れこむ

爲めに文字通りの濁流滔々たる大陸的な河相を呈し、従がつてそれに依つて生活する動植物の形態も變つて来る。

残飯を水中に投ずると長さ七八寸から一尺位もあるウグヒに似た魚が集まつて来る。用意して来た釣道具で釣るといくらでも釣れて来る。飯粒を散いて黒く群がつて来る所を信をつげつに針だけを投じて引き上げて結構引つ掛つて来る程魯鈍な魚である。ウグヒに似てゐるが鱗が鯉鮎族のそれである。特別な味を持たない身の柔らかな魚で、北海道や本州地方では見た事のない種類である。プープニ驛からバルカタ驛の間には無数にカラスカヒの一種が棲息してゐる。これは内地に生活するものとは鯉鮎の形や介殼の内面の色彩等が少し異なつてゐる様に思はれる。午後になつて不安であつた空模様がやうやく定まつて日光がきらきらと川面一ぱいに照りつける。河岸のハイマツが朝露の餘滴をちかちかと光らしてゐる。

二時頃に遙かの空を悠々と圓を畫いてオホロシが飛んでゐるのを見つけた。

ヌイオから廻つて来た軍政部の人を乗せた二艘のギリヤークの獨木舟に會ふ。漕ぎ手達は兩方から近寄つて菓子や烟草やその他の品物を交換した。その舟には私達の舵手であるハシカン少年の兄が乗つてゐた。無跡のこの曠莫境で仲間に相會することは又云ひ知れぬ嬉みであるのである。夕暮近くバルカタに近くなる頃、水面に黒い頭を出してアザラシが出没し出した。

## 北樺太採集記

アザラシを呼び出すのだと言つてホーホーとギリヤークが低い聲で水面に向つて呼ぶ。

此のプープニより以北河口のヌイオにかけて夥しいヨシシロアザラシ *Sterna aleutica Baird* の棲息地であつて特にヌイオ海岸にあつては夏期蕃殖地として年々數十頭が其砂地に巢を營んで雛を保育するのである。

バルカタの繋留場へ着いた時は九時頃であつたが未だ落日の餘光は河も空も人も舟も包まず、所謂ホーライトナイトをしのばせる様な気分である。驛舎迄は二十四町程であるが、以前のプープニ驛舎のその様ではなく、河岸の近くにわづかに成つたヤナギ類や針葉樹の外は一望のツンドラ地帯でクロマメノキ *Vaccinium uliginosum* L. プラタナス *Vaccinium Vitis-idea* L. ホロイナンチヤ *Chamaedaphne calyculata* Münch 等の石南科の植物が一面に繁茂してゐる。此のバルカタへ上陸して私達は始めて完全なケレンツンドラに接する事が出来たのである。驛舎への通路、紫のつぶらな實を結んでゐるクロマメノキやコケモモの實を摘んで食し乍ら此のツンドラの植物を食して生活する昆蟲を採集する明目を樂しみ乍ら驛舎に着いた。この驛舎は前に小さな針葉樹を持つた小丘の麓にあつてプープニ驛舎の密林中にあるのとは違つて總ての點にめぐまれてゐる。この夜も驛舎の前を流れてゐるバルリシツク川の岸で前方の林に燈を向けて十二時近くまで採集をしたが満月近くの月の明るさで幾許も採れなかつた八月十日 曇。

昨夜はあれほど晴れて月明の夜であつたが門から花曇りの様な天氣で暑い。採集にはよい日和である。昨日澤山に打つたIさんの鴨で鴨汁の贅澤な朝飯をすまして一同採集に出かける。前の小丘に熊があて危害は加へないが時々この驛舎附近に出没すると云ふので三人程の兵士の人と動物の人や人夫達が各自に銃を持つて勇ましく出發した。

植物と昆蟲の班は河の附近迄シメシメと足を濡らす水溜りも、苦にせずツンドラを踏んで行つた。そして午後迄には豫期した通りのツンドラに棲息する蝶類の多くを採集する事が出来た。殊にシジミテフ科に屬するカラフトクロツバメ *Eveves Fischeri sachalinensis* Mats. は原種は邦領では朝鮮や濟洲島に産するもので、その名稱が示してある様に翅の表面の黒い小さな可憐なシジミテフであるが、私の今日採つたものは原種よりもつと小さく、原種にあつては裏面に有する斑點が前縁にあるものより亞前縁にあるものが遙かに大きいのであるがこれは一樣な大きさである。この蝶が朝鮮と此所のみで産すると云ふ事實は昆蟲地理學の上に確かに或る暗示を與へるものと云はなければならぬ。特に南樺太では餘りあるないカラフトルリシジミ *Lycæna opiflete sibiricus* Steg. が鐵色の泥炭水に十四位づつ集まつてあるのか五六ヶ所目撃し且つ澤山に採集する事を得た。又シヤクトリムシ科に屬し晝にのみ活動する類の感じのよいウラケンエダシヤク *Teana fulvaria* Vill. も十匹程飛翔してゐたの一部分採集出来たこの他にカミキリムシ科のスマイロハナカミキリ *Evodinus ma-*

*nthesimi* Fald. の變形種を採集した。これは小さな黒い色をした身體つきで翅鞘に黄色の小點を持つてゐて余帯に金の微毛をつけてゐる。シベリヤ地方を原産とするものであるが餘程珍らしいもので、原種にあつては翅鞘の後方に三個の横に長い點があり、接合線の先端に新月形の黄色紋が兩鞘に跨がつてゐるのであるが、これにはそれ等が全々缺けてゐる。

愉快な採集を終へて驛舎に歸つて見ると熊狩の連中が歸つて來てゐる。熊は動物班の武力?に怖れて片影だも認め得なかつたさうである。熊はとれなかつたがキキツキ(クマゲラ)や其他の小鳥を澤山とつて來たから晩餐にはキキツキ汁を御馳走するさうである。晝食後は前の流れをそふてトンボの類を採集する。

素張らしく大きなエンヤン *Aschna Juncea* L. を始めとして、顔は白く體の黒い蕭灑な感じのするカホジ *トロンボ* *Leucortinia dabia* Linden. や瑠璃色の非常に美しいカラカネ *トロンボ* *Cordulia aenea* L. などの採集があつたが之等は何れもシベリヤ・アムール又はヨーロッパの原産で樺太或は北海道日本アルプス等の以外には未だ採集されて居ない種類である。

トンボの採集をしながら小川を下つて本流と合する近くに鮭が肉を裂かれて死んでゐる。熊が取つて食ひ荒らしにしつものである。未開地時代の石狩川では湖のほつて來る無数の魚族を熊が手の平で引き上げて食つたと云ふ事を古老達から年少の頃によく聞かされたが、それを目の當り見るのである

凄い事である。

繋留所近い所でツイミに流れ出する驛前を流れてゐるパー  
ルリシツク川を五里程溯のぼつた所にはツングース族の部落  
がある。

その部落を親しく訪問したかつたのであるが日程がなくて  
出来なかつたのは残念であつた。ツングースとは如何なる民  
族であるか私は少しく調べて見た。

### ツングース

北樺太には現在太古亞洲亞系民族に屬する前述のギリヤークと、ウラルアルタイ系民族に屬しツングース亞族に入るツングース、オロツコ、ヤクートの三種屬とが生活してゐる。

ツングース族は露國の人類學者イ・ペ・ポツドヴァヌイ氏の説に依れば全ウラルアルタイ民族中で最もその民族性を喪失しつゝあるもので、露人や蒙古種のアリヤトやトルコダツタ種種のヤクート等の人種との接觸につれて漸次その個性を消滅しつゝあるさうである。西比利亞に於ける彼等はヤクート族とは古來から犬猿も唯ならぬ仇敵同志である。彼等自らは「ハムニカン」又は「ドンク」と稱するのであるが、この敵であるヤクート族がつけた惡名で、豚を意味するものさうである。ツングースの故郷は對岸シベリヤの大河エニセイの東の支流ツングースカ河の流域らしいが、その分布區は甚だ廣く、西はエニセイ河を境とし、東はオホツク海岸、北は北氷洋、南は支那國境と云ふ様に東部シベリヤの大半に點々として分

布してゐるのである。如斯廣く分布してゐるツングースは學者に依つて三つの種類に分けられて、アムール河を境として南北に、オホツク海の沿岸地方に住むものをラムト(Lamut)と呼ばれてゐる。

彼等がこの様に廣く分布してゐると云ふことは確かにその民族性に依るものであつて、彼等は古くから英敏、聰明且つ勇敢で、冒險的な性質を具へてゐた。彼等はシベリヤ地方に彈力の無い灰色の不活潑な生活を續けてゐたパルアジヤートに屬する多くの民族を驅逐して縱横にその生活區域を廣めて行つた。

彼等の能動的な征服的旅行者の一團は遂に舟を停べ靜かなる浪の日を選んで一葦帶水の樺太は勿論遠く北海道や北本州迄も南下した時代すらあつたらしい。一説に依れば今の小樽の語源はアイヌ語ではなく、字義の解譯は絶對的の信を置く事ば出来ぬが『我れば大海を渡り』云々の手宮古突厥文字はツングース系發音であるとせられてゐる今日、上陸した彼等に依つて *Chou* (門番) と云ふ意味で之を呼んだのであるとさへ云はれてゐる。肅慎、靺鞨等の名稱を以て古くから支那や本邦の書典に残されてゐる人種は實に彼等一族であつて、沿海州に口を開き、灣をなし大河の注ぐ沖積土の發達した地方である小樽や山形、秋田地方に迄紀元前の頃には移住したものでらしい。閑話休題。ツングースは進守的の民族で、多くのシベリヤ、樺太等に住する土人の内では相當の重要性を帯びてゐるものであるが、目下の彼等の生活は森林中にトナカイ

を唯一の同伴者として生活し、主として狩獵をなし、ツンドラと密林の中を轉々と放浪してゐる民族である。北樺太に住する彼等は鳥井博士に従へば五十人許りで、此のバルカタを本據としてツイミの支流で、西の山脈から流れ來りブープニとバルカタの中間で合するメイシ川畔及び東海岸の北端等に分布し更に西海岸のホギベ地方のツギシ川畔に住してゐる。

今彼等亞族の一般的體質を舉ぐれば、身長は中位、頭は比較的大きく、肩は廣く、身體は瘦せ形であるが筋肉はよく發達し、眼は黒く、頭髮は眞直で黒い。顴骨は秀で、眼は細く眼と眼との間は廣く、所謂ツングース型の多角で耳朶の小さい耳を持つてゐる。ギリヤークに比して遙かに鬚が少なく、一見して善良な親しみ易い感じを抱かせる顔貌であるが一派の慥悍性がある。學者は北樺太の彼等即ち南部ツングースは北部ツングースに比して身長は秀でてゐる事を舉げてゐる。衣服は馴鹿の毛皮で作つた長い上着を用ひてゐるが多くはロシア化したルバシカ様の上着を用ひ、頭に硝子玉の頸輪を嵌めてゐるものもある。女子は木綿の明るい色合を用ひ下に到るに従つて廣がつてゐる長い服を用ひる。頭髮は男子は全々斷髮であるが、女子は兩側に結束して露西亞の農家の婦人に眞似て風呂敷の様な布を被つてゐり、歐洲婦人の様なスカート様の更紗等の衣服を用ひて居る。

バルカタ村を本據としてゐる五十人内外の彼等は十四五年以前からヤークト族のウイノクルフ氏を酋長と戴いてゐる。此のウイノクルフと云ふ人はモスコウ大學を卒業したとか云

ふ由で、不規律な彼等の生活をよく統御しギリヤーク、オロツコ等の諸族の間に彼等ツングース族をして優越權を握らしめてゐるのである。

ギリヤークに強大な犬が財産である様に彼等の唯一の財産は馴鹿である。

樺太に棲むトナカイは學名を *Rangifer tarandus sibiricus* Schreber. と呼ばれ鹿科に属する唯一の肉食獸で、シベリヤや樺太のツンドラに生活し、冬の間は、所謂トナカイゴケ *Cladonia sanguiferina* を食してゐる。體色は灰褐色で、高さは四尺五寸位で體長は六七尺位である。雌雄共に角を有つてゐるが、鹿の角の様に硬くなく、横に擴がつてゐて、血液の流れてゐる様子が窺はれる程の柔らかさで、天鵞絨の様な軟毛が密生してゐる。十月頃に約十日間位の交尾期が續いて七ヶ月目で即ち四月頃に一仔(稀に二仔)を分娩する。産仔期の四月頃になると角はみな脱落するが秋の交尾期迄には立派に伸びるのである。非常にその生活地帯に適應した動物でツンドラや積雪の上を歩行するに便利な様に蹄は歩く度に平らに開く様に出來てゐる。重い大きな角を持つてゐる關係であるが、後肢よりも前肢が強く従がつて土人達は之に乗る時は肩に鞍を置いて乗る。冬は糧を曳き、毛皮を供し、肉を與へ乳を給し、又はクリームを製することも出来るし、醗酵させて酒を造り、又その滓からは乳の餅も出来る。角は細工物となり、皮は靴や敷物としてツングースの生活資料の大部分を供するのであるから彼等は此の獸を非常に大切に、彼

等自身の發動と云ふよりも寧ろその家畜の爲めに轉々と水草を追つて生活してゐるのである。この獸の壽命は普通十五年内外で、最も用に足りる期間は生後五年目位から約五、六年間であるさうである。

ツングースの飲食物はギリヤークのそれと比ぶれば遙かに文化的であつて、主要食物は肉類であるが、鹽を加味し、之に穀類や砂糖等を加へて煮ることもある。彼等の最も嗜好する食物は馴鹿の胃中にある半消化の流動物を陽に乾して、餅の様にして、これにクロマメノキやホロムイチゴ等の酸味を加へたものであるさうだ。冬期は、魚肉や魚卵等を種々なる方法を以て貯藏し、又之と共に色々の食果植物をも貯藏して食するさうである。

露西亞や其他の文明人と接觸するに從つて金屬性の種々な道具が入つて來て原始的な風俗や習慣が破壊せられるのであるが、昔の彼等は服を縫ふには總て馴鹿の腱を用ひたさうである。

熱し易い彼等はあらゆる出來事を舞踏を以て祝福し、熊を射た時等は擧つて手を打ち足を踏んで神靈に感謝する。彼等は勿論薩滿教であつて、ギリヤークの家族的のシャーマンよりも進化してゐるプロフェツシヨナルシャーマンである。北樺太の巫人はギリヤークの部落をも訪れて親しく祈禱をするさうである。彼等の生活力の主要部をなす馴鹿に對する靈的感謝は云ふまでもなく樹上に色々の供物を懸け呪文を唱へて盛大に祭るのである。

## 北樺太探集記

その家屋は轉々として移り變る爲めにギリヤークの様に固定的なものではなく、天幕式の「ウラサ」と稱する圓錐形の小屋である。ウラサの多くは普請場等で見られる様な針葉樹の圓太材を相互に斜めに組合せて立て掛けられたもので、樺の頂部は交叉に依つて支へられて居るのであるが、中には屋蓋狀に組立てたものもある。冬期はこの外部を白樺の樹皮を以て被ひその上を更に馴鹿の皮を以て葺き、隙には乾燥した蘚苔を詰める。床には針葉樹の落葉や、乾いた蘚苔等か敷きその上に更に馴鹿の皮等を敷いてゐるものもある。中央には木で圍んだ爐を設けて居る。このウラサを設ける時はその地方が馴鹿の食餌が豊富であるとか、狼の獲物が潤澤で貯藏するだけとれる見込があるとか、冬籠りする時等に限つてゐて多くの場合は四本の支柱に布を被せた簡單な天幕に依つて生活してゐる。

## オロツコ及びヤクト

北樺太には上述のギリヤーク、ツングースの二族の他にオロツコ及びヤクトの二族が生活してゐる。

オロツコは露人はオロチヨシと云つてゐるが、彼等自身では『ウルツエン』又は『ウルチャ』『ウイツタ』等と呼び、ギリヤークは『オヒングシ』等と呼んでゐる。オロツコと呼ぶのはアイヌが云つたものであつてそれが今では學術的名稱になつてしまつた。之等の名稱は皆島井龍藏博士の説を引用したものであるが、私は獨木舟を漕ぐギリヤークに聞いた所

が彼之を『ヨロツコ』と呼んでゐた。オロツコは全々前述のツングースと同一種族であつて、樺太にはボロナイ河畔とタライカ湖畔及び北樺太の東海岸に分布してゐるものであるが、對岸の西比利亞に於ては黒龍江と烏蘇里江に界するシホタアリン山中の海岸線に散布するもので、即ちデカストリー灣から四百度位の所に生活してゐるものである。彼等の生活は全く馴鹿に依つて支へられてゐるのである。従つて其分布區域も亦其家畜の食餌植物の豊富な場所に限られてゐるのであつて、馴鹿が其食餌であるトナカイゴケを食してしまへば他所に移住し、三年乃至四年を過して其植物が再生した頃に彼等は再び其家畜と共に歸つて来る。オロツコはツングースとは全く同一の種族ではあるが、其故郷が各々異なつて自然的環境が然らしめた爲めかツングースよりも幾分身長が低く其生活も亦前者の様に狩獵的生活をしないで全く原始的な遊牧生活をなしてゐる。彼等の樺太に渡來したのは前者よりも古く、島井博士は前者の三代から以前に溯ほらないのに反して彼等は餘程以前から移住してゐたものである。

北樺太に住する彼等はワシ、オフォーゲン、ヤコツーン、ダツツ、ダーゲ、コロマイの都合六村から成り、人口は總て一二九人で、男子は散髪をしてゐるが、女子は辮髪して衣服其他は今尙ほ古風の姿が残つてゐる。家は非常に簡單で其地に止まらうとすれば丸木を集めて其上端を結び圓錐形にして内部は魚皮を以て被ひ中央に圍爐を掘つてゐる。冬期はギリヤーク等と同様に山中に移る。

彼等も亦シヤマンを信じ、木偶を作る風習がある。其藝術的要素は木片に彫刻した古帽子や衣服に縫取をしたり人形を刻んだりする事に依つてうかがふ事が出来る。彼等の言語は全くツングース語の系統であるが、其附近に住んで時には相會する事もあらうツングースとは相通する事を聞いたことがない。北樺太に住む彼等はバルカダ、ツングースよりも生活の程度が低い。之は一つは前者には立派な指導者があるのと又移動生活をしてゐる間に様々の文明人と接觸した結果であらう。我々大和民族は言語學上から、又土俗學上から其他様々の點に於て之等のツングース族と共通な點を見出す事が出来る。太古亞細亞系の民族に比して勇敢で理知的な彼等は其環境の如何に依つては立派に發展する可能性を充分に持つてゐる人種なのである。

### ヤークト

樺太には以上の三人種の他にヤクトと稱する人種がある。彼等はバルハタ、ツングースの集團に入つて生活し、唯八名よりゐないけれども西比利亞のユダヤ人と稱せられてゐる位に怜悧で従つて對岸西比利亞には非常に廣い分布區を有してゐる。現にツングースの酋長であるウイノクルフ氏はヤクト人であつて數人の少人数でよく多數のしかも異人種を統御してゐるのである。彼等は純金たる土耳古民族に屬し、西比利亞にあつては牧畜を業となし、古來から其家畜を勞はる事は有名な話である。宗教や其他の風習も亦、ツングース族や

太古亞細亞族とは自から異なつてゐる。

x

以上北樺太に生活してゐる民族は文化民族を除いて太古亞細亞系民族に屬するギリヤーク族と烏拉爾阿爾泰系民族の中の通古斯種に屬するカロツコとバルカタ・ツングースの二人種と土耳其韃靼種に含まれるヤクウットの四種族が生活してゐる

## 講 話

# 石油地質學概要(九)

大 村 一 藏

### C 第三紀層中の油田

#### 1. 亞米利加合衆國の第三紀層油田

a. 沿岸油田 Gulf coast oil field

位置、沿革及産額 本油田はテキサス、ルイジアナ兩州のメキシコ灣に近き地帯に發達せる油田の總稱である。其の發達の區域は海岸に沿ひ延長約二〇〇哩、巾の最も廣き部分即ち海岸よりも遠く發達せる部分は約一〇〇哩に達して居る。

而して各種族は各々其故郷である對岸西比利亞に生活してゐたと略々同様の生活様式を維持し、此地の第一の大河であるツイミ河を中心として方々に分布してゐる。而して彼等の中で一番古くから冬の結氷期を待つて韃靼海峽を渡つて渡來したのはギリヤークであつて、ヤークトとバルカタ・ツングースの渡來したのは近々三、四世代に過ぎないのである。